本多猊下の三大名著

法華經要義

四六判　六百數十頁
總振假名付
定價　金參圓

法華經の教義を整束し極めて平易懇切に講述せられ、今回特に賜天覽、供臺覽、空前の好著なり。

日蓮主義の心髓

四六判三百五十餘頁
總振假名付
定價　金壹圓八十錢

法華經要義の姉妹篇なり、日蓮主義の精髓を領得せんと欲する者の必須缺くべからざる良書なり。

日蓮主義精要

四六判　七百餘頁
總振假名付
定價　金參圓五十錢

十二篇に分類し教義信條の整束歸結を懇說せるもの、誰人にも易々として理解の金鍵を與へらる、空前の指針、大燈明の賞讃あり。

「教」發行所

統一定價

一部	金貳拾錢　送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢　送料共金貳圓貳拾錢
一ヶ年	

統一廣告料

表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾五圓
半頁	金九圓
四分一頁	金五圓

前金之事

昭和四年十二月廿四日印刷納本
昭和五年一月一日發行（第四百十八號）

編輯兼發行人　磯部滿事
印刷人　鈴木日雄
印刷所　都印刷所
東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
電話高輪六〇二四番

發行所　統一發行所
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
振替東京五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

不許複製

目次

所感……本多日生
法華經の正憶念（完結）……本多日生
諸教の批判に就て
天風三萬里紀行（其七）……小林日種
常林寺日寛上人事蹟一端……松尾清明
記事……
○在米野口上人より　○知法思國會懇談會　○各地教報
○偶言一束　○誌料領收　○知法思國會會計報告

第三十五年二月號

所感

（十一月三日屋外教化運動懇親會に於て）

理事長　本多日生

今回の街頭宣傳に關してこれに從事せられ、或は聲援せられた諸君の勞を感謝し、併せて自分の感じた事柄を一二申上げたいと思ひます。

此の計畫を致したのは時代の推移に鑑み、又日蓮聖人の事蹟に鑑みて、吾々は巷に出でて大衆に接觸して教へ導くがいゝと考へたのであります。殊に今日以後日蓮門下の活動の中には、街頭宣傳の一種の布教方策が起らなければならぬのであるが、併しそれには十分の準備と經驗と內容の充實したるものでなくてはならぬ。今までは往々街頭布教と言へば間に合せなやうな事をやる傾きがあるかに考へるのでありますけれども、十分にその準備なり方法なり內容なり、すべて完備したるものを以て、これに當らなければならぬ、而して吾々は其の範をつくりたいといふやうな希望を以て此事に從事したのであります。ところが自分としては確に最初の目算の通りに此の什事は成立つたのであります。局外の無責任な者は何とか批評する者があるかも知れません。

私の耳には直接何にも入らんけれども、世の中にはいろ〳〵意見の違ふ者もあり、感情の違ふ者もありますから、『此の寒いのに年老つてそんな所に出なくとも宜からうぢやないか』といふやうな事を言ふ者があるかも知れません。併しそんな批評は蚊が鳴くやうなもので何も問題にする必要はありません、

吾々が多年の研究なり考慮の上から、時代の推移、聖人の事蹟に鑑みて、街頭に出でざるべからずといふ判斷を下した事に毛頭の間違は無いのであります。それ故に今回の事業は實に愉快に完成を告げたので、これを第一期の修練、第一期の經驗と致しまして、更に今後の活動方法を定めたいと思ひますが、私としては今年はもはやだん〳〵寒くもなつて來るのと、第一期の成功に就てあまりのばせて無期限にやり出すといふ事もどうかと思ふので、先つ今回は一幕閉ぢて、更に引續いて第二回の活動を起すといふことは、それは永遠の活動を意味するものであるから、十分に考慮して萬全を期して、更に精兵を選び、更に道念を鍛うて大いにやるといふことが宜からうと思ふ。今日の懇親會の機會に於て引續いて活動繼續の相談をしようといふ意見もあるやうであるが、今夜の勢ひで急いで相談しなければ後では成立たぬといふやうなことならば、その熱心、その感激は未だ眞實のものでないと謂はなければならぬ。

尙ほ深く感じたことは、講師の側に於て、最初の頃は聲が立たぬといふか、何となく力の入らないやうな點もあつたやうでありますが、だん〳〵熟練して來て音量、態度、從つて膽玉といふものが非常に發達した事が明かに見えて來ました。今回は會員の中から講師として初めて街頭に立つて講演をしたといふ人が多數あるので、先刻來それ等の人の感謝の辭にも異口同音にその點を述べて居る通り、是は實に本人の爲にも敎の爲にも慶賀すべき事であります。ひとり街頭ばかりでなく、どうしても法を說くには先づその音量が定まらなければ人に感動を與へることは出來ません、どんな善い事を話しても、言ひながら聲が顫へて居るやうなことでは、迚も實彈が先方に達するものではない、途中でフワ〳〵と消えてしまふ。それが今度の街頭宣傳に於て、すべての人が非常に音量が豐富になり、又膽玉が据り、殊に

道念の發育したことに於て、是は實に偉大なる收穫であつたと思ひます。のみならずその言論の內容に於ても、時間が制限されて居るのと、又聽衆が路傍に寄集めて來た人間であるから、少しでも迂遠なやうな、廻り遠いやうな事を言うて居つたのでは目的を達することは出來ない、そこで非常に注意をして簡潔明瞭に、最も人心に接觸を取るやうに適切な話をするといふことに努力しました爲に、話にも無駄が無くなつて、講話の實質が精練されて來たといふことを感するのであります。昨晩それ等の人の講演を後ろの方から聽いて居りましたが、孰れも敬服致しました先づ百點を以て皆完全に優等卒業の人々であると思ひます。私はその點に於て實に言ひ盡せないところの欣悅を持つたのであります。何としても講師その人を得なれば、他の準備が如何に整頓しても、實際に言ふ事が內容が空疎であつたならば効果は無い譯であります。それが實に悅ばしい點であります。

それから信徒、會員諸氏の熱心なる應援外護でありますが、これも豫想以上に皆熱心でありまして非常に悅ばしく感じたのであります。無論多年訓育せられた人々であるから、斯うなければならぬとは思つて居つたけれども、前に京藤義應君が大阪から出て來て感じた事を述べられた通り、平生の講演會にもあまり會に出ぬ、フラ〳〵して居るやうに見えて、どうも東京方面の信徒といふものは、十年二十年自分は骨折つて法を說いたけれども、是は結局引去つて泡みたやうなものか知らんと思つて、實は多少心細く思つて居りました。所が何ぞ知らん、それ等の人は皆モウ一通り卒業して出來上つたものであるから、所謂豫備、後備に入つて居つたといふやうな譯である、それで現役の兵隊が少なく見えたのであるけれども、併し動員令を下せば孰れも現役を凌ぐやうな勇氣を以て活動せられたといふことは、非常に

心強く思つたのであります。殊に婦人の方に於て、報恩閣の婦人の方々は婦人會としての訓練がしてないからあまりあてにならぬだらうと考へて居りましたが、何ぞ知らん、實際は非常に熱心な立派な働きをせられたことは、先刻働く會の會長峰田君の稱揚した通りのことでありまして、是も確に感激致したことであります。その他各方面の婦人の人が、忙しい中を繰合せて奉仕せられたことは、今回の街頭宣傳に於ける優に一つの美談として傳ふべき事であります。

モウ一つは聽衆として集まる方の人に就てであります、存外相當の人も寄つて來ますし、寄つた者が殆んど途中から立去るといふやうな者がない、最後まで靜肅に謹聽するところの態度、確に純潔に法を求めて居るやうな狀態に見えました。最初はひやかしのやうな考で集まつた者も、少し話が進んで參りますとそれに感動して、純潔なる求道者に變つて居る有樣がアリ〳〵と見えるのであります。其の實例は私の眼には幾らも映つて居りますが、涙を以て感ずる程の事が幾らもありました、一二を申しますれば、一番初めの明治神宮參道前の所でも、若い娘の人達が聞いて居りましたが、それが初めて斯ういふ話を聞くといふやうな有樣であつたが、だん〳〵感じて來て終ひにはヂット頭を低げて實に敬虔なる態度を以て此の尊き教に感孚して居りました。それから十月三十一日に淺草の壽仙院の門前で講話をした時分にも、十三、四歳の汚ない印半纏を着た丁稚小僧のやうな子供が三人も一番前列に來て居りました、それが皆掌を合せてヂッとして謹聽して居るその態度といふものは、實に活きた宗教の現はれであります。その他さういふ例は多々あるのであります、彼の有樣を見まして、とても屋内の殿堂に於て得難いところの、人間の本然性に基く純潔無垢なる宗教心を啓發することに於て、街頭宣傳は實

に有効なるものだといふことがわかるのであります。

又法を說く方の心理狀態に於ても、公園などであれば、仰いで見ればそこに月の光が煌々と輝いて居る、横には木の葉が動いて居るといふやうな、自然の風光に接して法を說くのでありますから、說く方の心理も非常に純潔無垢なるものであるし、さうして今言ふやうな簡單明瞭な話をすることに依つて、無駄な宗義葛藤や煩瑣な教義といふものは悉く篩ひ落されてしまつて、最も純眞なる宗教の琴線に觸れた話のみがそこに現はれて來るのであります、是は確に街頭宣傳といふものに依つて、簡潔明瞭なる、活々したる宗教がその内から生れて來ることを實感する次第であります。斯樣な意味に於ても深き感激を持つた次第であります。

之を要するにすべての方面の事柄を總計して、今度の街頭宣傳の計畫は大勝利、大成功であると私は祝したいのであります、之を以て先づ諸君に感謝し、併せて前途に此の事業の十分なる發達を爲し得べきことを確認したる悦びを、諸君と共に頒ちたいと思ふのであります。（拍手）

附記、右は前號に掲載すべきでありましたが乍遺憾紙數の都合で今回になりました事を申添へます。

誰か能く此の娑婆國土に於て廣く妙法華經を說かん、
今正しく是れ時なり。

法華經寶塔品

法華經の正憶念（完結）

目次

七、菩薩行の應用　八、佛と法、僧　九、四恩の行法　一〇、佛教に對する妄評と法華經

大僧正　本多日生

七、菩薩行の應用

さうして法華經の菩薩行の有難いのは、菩薩行といつても迂遠な、例へば賽の河原で石を積んで居るのを慰めるとかいふやうな、さういふ實生活に緣の無いことをやるのではない。法華經の菩薩行は、最も實際的なる、價値ある事を選んでこれを爲せよといふ、即ち菩薩行の應用に就て說かれて居るのである、それが非常に適切な事ナンである。その趣旨に基いて日蓮聖人の菩薩行のやり方は、ハッキリと現實生活に一致するやうに現はれて來て居る。先づ菩薩としては一切衆生の生前を安んじなければならない、それには人々の心を先づ善くする、所謂「立正」であつて、正しき敎を與へて人格を敎化し、その正しき精神よりして「安國」すなはち國家を安泰にし、その榮え行く國の力を以て世界を照す、日は東より出でて西を照す、內に立正安國を唱へ、外に皆歸妙法を論じて、日本の天職をお示しになつた、その活き〳〵したる所の菩薩行といふものが、法華經の正憶念より來ることナンである。「それは日蓮聖人だけがさういふ事を特別にやつたので、法華經の意味はそれと違ふのだ」などと思ふのは、法華經の眞精神を理解せざる者である。法華經の活き〳〵したる菩薩行は正にそのとほり『若說俗間經書、治世語言、資生業等、皆順正法』の經文になつて現はれ、『畢竟住一乘』の經文になつて現はれ、或は大薩遮經の王論品になつて現はれて、まことに明瞭に、現在生活に最も効能のある、適切なるものを選んでこれを實現して行くことになつて居るのである。だから日蓮聖人の主張は、先づ國家に對しては立正安國となり、世界に對しては皆歸妙法となり、又これが家庭の道德としては父母孝養となつて現はれて居る。從來の多くの坊さんは、「家を捨てゝ出家したら親の事などは考へないでも宜い」と言ひ居つたけれども、日蓮聖人は出家せられても父母の恩といふものを何處までもお說きになつた。自からも六十歲の老齡に達して身延の山に居られて、故鄕房州の海苔を貰つてそれを燒いて食べようとする時に、海苔の匂ひがプーンと鼻を衝いた、「あゝ昔故鄕に於てお母樣が燒いて下さつた海苔の匂ひがこれであつた」……母親の御恩を想ひ出して涙抑へ難く、遂にその海苔を食べることが出來なかつたといふ、あの御消息などを見ても、如何に父母孝養の志が强かつたかといふ事が窺はれるのである。今吾々がその通りに眞似をして見ようと思つて、十分に準備をして親の有難い事、斯ういふ場合に斯ういふ事があつた、あゝいふ事があつたといふことを想ひ出してそこに並べて見ても、なか〳〵涙は出て來ない。それが海苔の匂ひをかいで直に親を想ひ出して泣かれたといふ、如何にも日蓮聖人の親に對する熱誠なる孝心といふものがハッキリ現はれて居る。

それはやはり實際的の菩薩行として、日本の美風としては、日蓮聖人があゝいふ風に父母孝養の德があつたといふことは非常に大事なことである。賽の河原で石を積むとか積まないとか、そんな事は實際の人生にはどうでも宜い事である。いろ〳〵佛敎の菩薩行として現はれて居る事でも、迂遠な事もだん

〳〵ある、阿彌陀の四十八願などといつて四十八も並べて居るけれども、殆んど實際に役に立つ事は無いではないか、それは立願が迂遠であるから役に立たぬのである。第十八願が一番有難いといふけれども、それは往生したら阿彌陀樣の世界へ往けるといふだけのことであつて、餘の四十七願は持出して見ても別に効能のある事がないから、それは念佛宗でも使はないといふ譯である。四十八も殆んど全部役に立たないといふやうな、あんな願の立て方はどうも氣が利いて居ない、だからあゝいふ願の立て方では、吾々の宗旨の坊さんが學校を卒業してこれから社會に出て活動するといふ場合に、あんなやうな事を書いたならば、卒業證書はやれないと私は始終言つて居る。阿彌陀樣では宗教家になる資格は無い、あんな偏つた事だけ言うて居つては、現實の世の中を救ふことは出來ない。大體あゝいふお經をお釋迦樣が說かれたのは、お婆さんが自分の息子の王樣の爲に坐敷牢に入れられて居る、その息子が亂暴な人で、何と言つても母親を殺してしまはうとかゝつて居るのだから、何人がこれを助けようと思つてもどうすることも出來ない。そこで釋尊が窮餘の一策として、この人生に希望を繫がぬやうに、死んだら非常な幸福があるといふ死後の幸福觀を與へて、そこに精神の苦痛を免れて滿足を得せしめんが爲に說かれたものであるから、そこであゝいふ偏つた敎が出來て居るのである。それを持つて來て、現在人生に生活を營んで行くところの普通國民を導かうといふやうな事は、まるで見當が外れた話である。斯う吾輩が論斷することに對して、念佛者はどうすることも出來ないではないか、隨分この頃本願寺の大學でいろ〳〵の騷動を起して居るやうだけれども、今吾輩が言ふやうな問題も一つ眞面目に研究されて見たらどうぢや。どうしても四十八願のやうな偏つたものではいけない、モット氣の利いた、實際生活に適

應したる所の菩薩行を奬勵しなければならぬ。

だから日蓮聖人はそれを能く警しめて居られるのであつて、御遺文の中にも到る處に言はれる。

『厚き紙、國に充滿せんに皮を剝いで何かせん』

むかしは紙といふものが無かつたから、手の皮を剝いでそれにお經を書いて後世に傳へたといふ事が非常な功德であつたけれども、今のやうに紙が一錢か二錢で何枚でも買へる世の中になつて、掌の皮を剝いでそれにお經を書いて置いたりしても、チリ〳〵と縮んでしまつて役に立たぬではないか、それよりもそこらの紙屋で紙を買つてそれに書いて置いた方が宜しい。斯ういふ風に實際に効能のある菩薩行を奬勵せられたところが、法華經的菩薩行である。法華經を正憶念する者は始終それを考へて居らなければならぬ。さうすると現代の僧侶の生活などでも、よほど改善しなければ法華經の正憶念にならない。たゞ舊い型を守つて効能の無い事をやつて晏然として居るといふことは、これは懈怠懶惰の精神の致す所である。自分は不肖ながら數十年來、時代適應の方法と信ずる所に基いて敎戰に奮鬪を續けて來たのであつて、及ばざる所もあらうけれども、今なほあらゆる方面に於て努力をして居るのは、どうしても佛敎をして左樣な實際的有効なるものとして活躍せしめなければならないといふ事が法華經の精神であるが故に、その敎に導かれて今日まで命に懸けて努めて居るのである。ナニも物好や執はれた觀念でやつて居るのではない。さうする事が當然なる法華行者の本領である。今ごろ僧侶が中啓を持つて默つて控へ込んで、後鬢をおろしてエヘン……そんな事をやつて居るべき時ではない、日蓮聖人も

『迦葉の入定も時にこそよれ』

と言はれた、迦葉尊者が釋尊のお袈裟を戴いて雞足山に入定して、後の佛、彌勒佛が出世の時分に、これは先佛釋尊の御袈裟であると言つて傳へんが爲

に、一身を犠牲にして入定して居られるといふ、結構な事のやうだけれども、眼前の人生に斯の如き大事が起つて來たのに、「後の佛に袈裟を渡さんならぬからそれ迄は私は動けません」と言つて坐視して居るやうなことはいかん、眼を覺して人生に出て來て活動せよといふ意味を日蓮聖人は言はれた。迦葉の入定も時にこそよれ、況んや油揚を食つて居眠をして居るに於てをや、さういふ事は絶對に許されないことである。

どうしても今日は世の中に立つて活躍しなければならぬ、設ひ力及ばずとも活動奮闘すればその中に相當なる價値は現はれて來るものである。さういふ菩薩行を僧侶ばかりでなく、在家の人も法華經を信する以上は、各々の職業を通し、各々の地位に於て出來るだけの働きをしなければならぬ、前に申したやうに下女は下女として臺所の掃除の中にでもその光を現はして行く所に、法華經の菩薩行といふものがある。その意味をよく領解して行けば、お婆さんになつたからといつて何も力を落すことはない、大したえらい事はせんでも、お婆さんらしい善いお婆さんだといふことになれば、隨分世の中には惡いお婆さんも澤山あるから、それを反省せしめる手本になる。さういふ事になれば如何に年老つても張合が出來て來る、たゞ家に居つて嫁のする事を横目で見ながら、「腹が立つけれどもまア〳〵辛抱して置け」……といふのではない、この忍耐する事が法華行者の光を現はす所以だといふことになるから、そこに力強く生きて行くことが出來るのである。

八、佛と法、僧

以上申したやうに法華經の正憶念としては、先づ第一に佛樣の絶對の尊嚴とその無限の救濟力を信じて、そこに信仰心を持つて行くこと、それから其の信念より起つて菩薩行の實際的活動を勵んで行くこと、この二つが大事な點であるが、更にそれに續いて考へれば、その佛樣に伴うて起るのが、即ち佛法僧の三寶として、「法」といふ佛のお說きになつたところの教を重んずることである。その教は即ち法華經である、法華經は一切經の中の最第一の位地を占むるものである。その法華經を結要して妙法蓮華經の五字とし、この五字を唱へ言に移して「南無妙法蓮華經」と唱へるのである。その意味合を誤解しないやうに、南無妙法蓮華經と言ふからお釋迦樣が飛んでしまつたり、何處へでも持ち廻つたりするのでなくして、釋尊と關係の最も深い大慈大悲の妙法蓮華經を正憶念しなければならない。又僧寶としては、法華經を末代に傳弘するために本化上行菩薩に附屬せられ、その再身として日蓮聖人が出現せられた。その日蓮聖人の御教を尊んで、これを又正解して御遺文の本旨に悖らぬやうにして行くことが、これが法華信者の本領である。ところが今の粗末な法華宗の檀信徒は、日蓮聖人の御遺文とか、聖訓とかいふと、「へー御遺文ッて何でございますか、聖訓といふのは何ですか……そんなものがありますか、へー妙なものですナ」と言つて、日蓮聖人の御教があるといふ事すら知らない者がある。これが基督教徒であつたならば、如何に低級なる者でも、聖書があるといふ事を知らないやうな爺さんも婆さんも西洋には居らないであらう。法華の信者を今日百人寄せたならば、九十人ぐらいは「へー日蓮聖人の御遺文ナンといふものがありますカイ」と言ふ輩である、これは餘りに低級過ぎる。先づ以てどんな家庭に於ても、難かしい事は解らなくとも假名を拾つてでも、日蓮聖人の大事な聖訓は斯ういふ意味のものだといふ事を心得るやうにしなければならない。今までのやうに、お題目さへ唱へれば何にも知らないでも宜い……と言ひ過ぎて、何處まで行つても譯のわからぬ儘に置いて居るといふやうな間違つたやり方は、

全慶してしまはなければならぬ。であるから日蓮聖人は法華經宣傳の高僧である意味に於て、所謂三寶の中の僧寶として、吾等を導きたまふ最善知識として敬意を拂ふのである。これは所謂佛法僧の三寶式として、當然考へられて來ることである、さうしてその中心は無論お釈迦樣である、佛としてのお釈迦樣を意識せずしては、法華經も日蓮聖人も無いものである。

九、四恩の行法

信念より出て善を行ふといふに就ては、今言ふやうに菩薩行となつて現はれるのであるが、その菩薩行を氣の利いたやうにやつて行くといふことを整頓して考へれば、やはり四恩の行法となつて、父母の恩、衆生の恩、國王の恩、三寶の恩といふやうに、實に能く整頓されて居る。それは法華部の大薩遮經にも四恩の說として說かれ、日蓮聖人の聖訓にも四恩鈔となつて現はれて居る。また日蓮聖人一代の活動を見ても、父母の恩、衆生の恩、國王の恩、三寶の恩といふ事が躬び行はれて悖らざるものである。儒教に所謂『大德は敦化し小德は川流す』といふ、その大德は即ち信念である、本佛を渴仰敬慕するところの信念を本にして、即ち佛に護念せられるといふ事より起つて、德本を植ゑる、その德本の中に父母の恩、衆生の恩、國王の恩等に報じて行くはたらきがある譯ナンである。然るにその信念を後にして、日本の國體が有難いものだからといつて、國體といふ事だけを言つて信念を後へ廻すといふことになつたならば、それは惟神道でもなく、又法華經的精神ではない。國體は無論有難いけれども、國體を擁護する精神の根本を心の鏡の如くする誠心に置き、一轉して法華經の信念より導き來る、それは當然サウあるのが本筋である。

儒教で言うたならば天道明德の教が根本となつて、それが實際に現はれて仁義忠孝となる、斯ういふ順序に行くのである。その天道と明德の關係のそこに宗教があるのである、さうして仁義の義より出でて『君臣義あり』といふ所に忠といふものある、國體の有難いこともその國家的範疇に於てあるのである。イキナリ義を先に說いて、天道が後になつたりするやうな逆まの考へ方は間違つて居る。ところがそれが解らぬ人が日本にはまだ一パイ居る、國體の尊嚴といふ事を言うたら、頭から尻尾まで國體さへ持出したら宜いと思つて、鏡の神勅を忘れ人々に天道明德といふやうな醇乎たる宗教信念を啓蒙することを忘れて居る者がある。多くの教育者などはさういふ風な弊があるのである、今の思想の健全派と謂はれる者にも大部分さういふ弊がある。これは惟神道に依れば第一心を鏡の如くすること、又儒教から考へても、天道明德より起つて仁義忠孝にいたるのである。佛教に於ても宗教的信念より導いてそこに諸の德本を植ゑるのである、また三歸五戒といつて、三寶に歸依してさうして五戒を保つのである。信念に基かざるところの道德は、彩色に膠なきが如きものである、繪の具ばかりあつても膠が入つて居らなければ、美しく描いた繪もスグに剝げてしまふが如きものであると釋尊は說かれて居る。

その意味を能く心得て行けば、四恩躬び行はれて行くといふことは、根本の信念が「大德」にあたり、いろ〳〵の道德行爲は即ち「小德は川流す」で、いろ〳〵の德が決して矛盾するものではないのである。よく小學校の先生などが兒童に對つて「お釈迦樣と天子樣とどつちが有難いか」といふやうな問を發するが、それは道德の法則がわからぬから、左樣な愚な問題を發するのである。その道德の法則が壞れて居る事が日本に於ては非常に恐ろしい事ナンである。小德は川流すといつて、親に孝行するのも、女房を可愛がるのも、兄弟仲よくするのも、君に忠

義を盡すのも、世の中に親切であるのも、佛を信ずる心も、さういふ道德的行動はみな躍び行はれて決して横切るものではないのである。小さく考へると親に孝行すれば女房は可愛がらない、女房を可愛がれば親に孝行はせぬといふことになるけれども、心といふものはさういふ狹いものではない。一旦豁然として貫通すれば、到る處みなその優しい考といふものが活躍して來る、衝ふ所みな親切の心の發露であるから、夫婦の間には愛となり、親子の間には孝となり、君臣の間には義となるといふやうに、その道德はあらゆる方面に燦爛として光を放つのである。心ひとたび曇れば、すべての方面がいけなくなる。女房の頭をカッ殴るのが親に孝行かといふとさうではない、女房に對して慘酷な人間は、やはり親に對しても孝行が缺けて來るのである。小德は川流するものだといふことを能く知らなければならぬ。

ところが西洋の文明はこの人間の心のひろい事、心の微妙なる事がわからぬ。所謂前に在るかと思へば忽然として後に在りといふやうな意味がわからぬ、前を向いたら前ばかり、後を向いたら後ばかり見て居つて、端倪すべからずといふ微妙なる意味合を心得ることが出來ないのである。その西洋の文明にかぶれてしまつたから、「佛樣を有難く思つたら天子樣を粗末に思ふだらう」などと言ひ出す、さういふ頭腦は靈妙なる人間の精神能力を領解し得ないのである。人間の精神能力といふものは、相たすけ合ふものであつて、自然を愛する心も、宗教の信念も、又藝術を愛好するやうな心も、道德を行ふ心も、一つの情操といふものが高まれば皆相たすけ合うて行くものである。だからいろ〳〵の德があつても、決して一つをやつたら他がお留守になる——天子樣を有難いと思つたら佛樣を有難く思はれないといふやうなものではない。

さうして又これ等の道德は、各々その範疇が違ふ

のである。即ち宇宙の範疇に於て天道明德といふものが論ぜられて居るので、茲に佛樣とか神樣とかいふ宗教的の有難いものがあるのである。それから國家の範疇に於て王樣の有難い事が出て來るのである、だからこれは他の國といふものが對立して居れば、その國の王樣といふものは何と言つても對等のものとして親なければならぬ。日本人が如何に我が皇室の神聖を說いたからといつても、英國の皇帝が來られゝばやはり對等の御挨拶をなさらなければならぬ、それは當然の事である、むやみやたらに日本の皇室は神聖だ、英國の皇帝とは違ふといふ風なことを言へば、國と國との交際は出來ない、否、あまりに强くさういふ事を言つたならば、日本の國は存立し得ない、內輪で言うて居る間は宜いけれども、これが表面的に世界の同題になつて「果して日本人の考はさうであるか」といふ事になつたならば、日本の國家といふものが存立を危くされてしまふのである。況んや宗教の佛樣や神樣に向つて、天子樣とどちらが偉いかといふやうな問題を提げて來るクライ危險性を帶びたる思想は無いのである。それを小學校の先生などが平氣で言ふから、兒童は弱つた顏をして返事が出來ない「どちらですか、天子樣が有難いか、佛樣が有難いか」「へー」「佛樣の方が有難いと思ひますか」「へー」「違ひます、天子樣の方が有難いのです」……斯ういふことを教員が教へて居る。さういふ教育を維新以來やつた結果が玆に現はれて來て、日本人は今や斯の如く精神の動搖を受けて居るのである。

だから吾々が德を行ふといふに就ては、日蓮聖人のなされた通りにやつて行かなければならぬ。日蓮聖人は唯だ國體のみを尊崇せられた方ではない、どこ迄も法華經と日本の國體との一致する點に着眼せられて、即ち『法を知り國を思ふの志』といひ、『王法佛法に冥し、佛法王法に合す』といふやうに、教

の尊い所以と國家の尊い所以とを倶々に能く御理解になつて『國は法に依つて昌へ』といふ事と、『國亡びなば佛をば誰か崇むべきや』といふ事と、その兩方の思想が、裏も表もよく調和されて居る所に、日蓮聖人の主張の長所を見なければならぬ。何處までも國が絶對で法を蹂躙してしまふやうなことになつたり、或は法が重いから諸法の國家は亡びたら宜いといつて日本の現狀を呪ふやうな思想になつたりするのは、孰れも間違つて居る。日蓮主義者の中にも或る人の如きは、日蓮主義は超國家主義ぢや、法華經は絶對の正法である、日本の國が亡びたつてそんな事は何でもない、諸法の國は亡びるのが當然ぢやと言つて、國家を侮辱したり呪つたりするやうな事を臆面もなく言ふ人も出來て居る。さうかと思ふとまた日蓮主義から出て、國體が有難い〳〵と言つて敎の尊嚴を傷つけても構はぬやうに、宗敎信念の尊いことを後に廻して國體を振り廻す、所謂天道明德の敎を後にして仁義忠孝を先に立てんとするやうな行き方をする者もあるけれども、これは聖賢の學に照しても、或は佛の敎に照しても、又惟神の道に照してもさういふものではない。明治天皇が『朕爾臣民と倶に拳々服膺して威其の德を一にせんことを庶幾ふ』と仰せられた如く、所謂德に對し、道に對し、大きな道德宗敎の根本に對しては、國王と雖も一般國民と倶に同じく拳々服膺するといふことであつてこそ、國王の御德も彌が上に高くなる次第である。そんな所に誤解のおこるといふのは、何と言つても考慮の足らざる所、無學の致す所と謂はざるを得ない。左樣な事をいつ迄も繰返して居つてはいかん、どこ迄も正憶念して行かんければならぬのである。

十、佛敎に對する安評と法華經

なほ續いて附屬的に考へて置くべきことは、法華經を宣揚し法華經を尊信することに於て、自分も救はれ世の中も救はれて行くのである、その有難さを能く考へなければならぬ。我は法華經を信じて絶對の歡喜に滿ちて居るが、願くはこれを他にも與へてその法悅を與にしたいといふことが、本當に精神の領解となり、信念となり、主張となつて現はれて來なければならない。法華經の敎は洵に有難い敎である、この敎を以し日本の國を救ひ、一切衆生を濟はなければならぬ。今日までいろ〳〵佛敎に對して與へられた非難の如きは、法華經に依れば悉く打消されてしまふものである。

例へば佛敎が厭世的な敎である、まことに抹香くさい悲觀的な、世の中を忘れてしまつて死んだ後の事ばかり言ふ敎だといふやうなことで、御一新の際に佛敎といふものは斥けられたのであるが、その非難は決して佛敎の本質には當つて居ない、悲觀厭世のやうに佛敎を應用したのは其の者の間違ひである。法華經の敎は前に言ふとほり、氣の利いた菩薩行をやつて行くのである、日蓮聖人が立正安國を高調されたが如く、生活の上には『女房と酒うち飲んで南無妙法蓮華經』と言はれたが如く、實に實際生活の内に信仰が緣込まれて居るものである。「酒うち飲んで」といふ意味は、決して酒を勧めたのでない、抹香くさいものでないといふ事を現はしたのである。女房と酒うち飲んでといふことは、ナニも法華の信仰は佛壇に向つて線香を立てゝといふばかりではない、人生の悅樂の裡に、女房と差向ひで「おい前も一パイやれ」といふ所にも南無妙法蓮華經は織込まれて居る、是れは實生活と調節して居る事を言ふのである。酒の好きな者はこの御遺文を濫用して「女房と酒を飲んでといふ事があるぢやないか、俺が酒を飲んだつて文句はあるまい」といふやうな事に使つたり、或は又禁酒運動などをする人は徒に心配して「どうも日蓮聖人は酒うち飲んでと言はれる

所を見ると酒がお好きであつたらしい、困つたものだ」などと言ふけれども、これはナニも日蓮聖人が酒がお好きだから酒うち飲んでと言はれたのではない。それは御遺文の文章を少しく文學的に考へたならば、とかく佛教が厭世悲觀の教の如くに思はれて居るから、そこでナニも佛教は暗い本堂の隅で抹香くさい事をやるのではない、女房と酒うち飲んで南無妙法蓮華經と唱へる實生活と一致さる、抹香くさい、厭世的の分子を排撃するために、女房をつれて來、酒を持つて來て、さうして南無妙法蓮華經と結ばれたところに、實に微妙な意味があることを知らなければならぬ。これを變テコに解釋して、「御遺文にも斯うあるから酒を飲んでも差支あるまい」とか、また「どうも困つたものだ、此の言葉が害になる」などと言ふのは、共に日蓮聖人の眞意を解せざる片々たる言草である。大聖人の警拔なる文章は、實に一言にして厭世悲觀の佛教でないといふ事を喝破されたものである。

また『極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず』と仰しやつた、日蓮聖人の當時、淨土門などが厭世悲觀の念佛を弘めて、遠離穢土欣求淨土などと言つて、この世は厭はしい穢土ぢや、はやく淨土へ〳〵……とやつて居つたから、その厭世的の教化を攻撃せられたものである。極樂へ〳〵と急いで極樂へ行つて百年も修行をしたからといつても、それは功德は少ない、穢土に踏留まつて一日修行する、その方が功德は多いのである。斯樣に此の人生に踏留つて善を行はなければならぬと主張するに對して、何處に厭世悲觀といふ理由があるか。さうして日蓮聖人が鎌倉街頭に北條を逆賊なりと絶叫して鬪かつて行くところの勇ましき奮鬪が、何處に厭世悲觀の面影があるか。その當時の役人でも學者でもみな聲を呑んで顚へて居つたぢやないか、それこそ見つともない消極退嬰の見本である。日蓮聖人は敢然として北

條の惡逆を膺懲された、これが厭世悲觀であるならば、剛勇果敢といふ事が何處にあるか。頭の座に据えられても『これほどの悅びを笑へかし』と泰然として居る、これが何が厭世悲觀であるか、下らぬ事を言つてはいかん。多くの儒者は見臺を叩いて生を捨てゝ義を取るなどと言ふけれども、いよ〳〵頭の座にでも引張り出されたら眞蒼になつて顚へ上るだらう、これは私が言ふのではない、吉田松陰先生が言ふのである、見臺を叩いて生を捨てゝ義を取るなどと、そんな事を口先で幾ら言うてもそれでは成佛は出來まいと松陰先生が言つて居る。如何に口が勝手に利けるからといつて、斯ういふ偉大な、剛毅天を貫いたるところの法華經の運動に對して、佛教が厭世的だの悲觀的だの、そんな事の言へるものではない。

大體釋迦如來の佛教建設の運動クライ勇往果敢のものはないではないか。當時の印度には婆羅門の教といふものがあつて、チョウド日本に神道の教が國の初めからあつたが如くに、印度は大梵天王に依つて開かれた國ぢやといふので、婆羅門種といふものが勢力を得て、四姓の階級制度が嚴然として立つて居つた。釋迦はこれが改善を叫んで、さういふ人爲的の不自然なる階級差別といふものは不合理であるといふので、遂に一人の力を以て此の婆羅門の階級制度を打破して鬪つたのである。それは實に勇ましなんど言ふばかりなきものである、厭世悲觀などといふのは何にも知らない者の言草である。さうしてそれ等の輩が厭世悲觀を左樣に嫌ふのは何だといふと、彼等は人間の死といふ事を極度に恐れて、死んだ後の事などを言つたらそれはモウいかん、「緣起がわるい、鶴亀々々」……とやるのが宜いと思つて居るのである。併しそれは餘りに低級な觀念であり、餘りに著世的な、殆んど野蠻人に等しき狀態である。人間といふものは何時死ぬかわからん、生命は

思うたより短いものだから本氣で働かなければならぬといふ事は、厭世悲觀ではない、苟も志士仁人は、何時死が來るかわからぬといふ事を考へて、さうして一日たりと雖も空しくせぬやうにして行くのは當然の心懸である。死を論ずればそれは厭世的だナンといふのは、實に病者の愚言である。

法華經の經文に戻つてこれを考へても、法華經は最も活き〳〵したる宗教であるから、その序品の開幕の光景からして、天からは華が降つて來る、虚空には音樂が聞えて來る、帝劇の女優劇の幕が開いて來るよりもモット爽快な、景氣のいゝ調子で法華經は始まつて居る、何處に厭世悲觀の調子があるか。抹香くさい匂ひがしたといふやうな事は一箇所もない、何とも言ひ樣のない芳い香がして來る、それは今のモダンガールが振り撒いて居る香水グライのものではない。さうして八萬の大衆が恍惚として居るところに、佛は眉間白毫の光をパッと放たれるといふ、その光景は實に人間の構想を超絶した雄大壯快なものである。序品の開幕からしてさういふ風であるから、法華經の全文を通じて、厭世的だの悲觀的だのといふことは何處にも無いのである。

又佛教を非難する者は、佛教の教化が獨善的であると言ふ。自分さへ宜ければ他人はどうでも宜いなどと言ふけれども、そんな事は阿含經に於てすら見ることは出來ない。小乘阿含の教化と雖も、苟も佛教である以上は、慈悲喜捨の四無量心といふものを說いて、人を救ふが爲めに働くのである。その事は阿含經の中に、阿含の徒が佛弟子として活潑なる實際的の働きをしたその傳が澤山出て居るが、それは皆人を救ひ世を濟ふが爲めに働いたものである。だから佛教が獨善的だナンといふことは、實に愚論も亦甚しいものである。永い間の信者の末にはさういふ者が出來て居つたらうけれども、それは教を傳へる人が惡いからさうなつたのである、佛教の教化の本旨は、その入口からして立派に世の爲、人の爲に盡すやうになつて居る。況んや菩薩行を說く大乘の教といふものは、獨善的ナンといふ事の正反對を教へて居るものが佛教である。それは日蓮聖人の一代の言動に鑑みても、法華經の教に於て考へても明白なことである。今でも一人の人間に法華經の信仰を與へれば、スグ其の人は利己心を去つて立派な考に進み行くやうになるものである。

又佛教が非國家的であるといふ批評もあるが、これも大きな間違ひである。或る者は佛教を習ひ損ねて國家を忘れた者があつたらうけれども、それは般若心經などを誤解した所から起つて來るのである、法華經の教化にはさういふ非國家的の事柄は一つもない、法華部の大薩遣經には王論品といふのがあつて、立派に國家の大事なことを說いて居る。それが爲めに古來法華經に接した人は、聖德太子を始めとして、鎭護國家の妙典としてイキナリ法華經を尊信せられた。傳教大師も法華經に依つて日本の國をまもる、鎭護國家の道場として比叡山を建て、以つて王城を守護するところの靈地とされた。日蓮聖人の法華經を弘むるや、第一に立正安國を高張されて、立正安國論となり、守護國家論となつて現はれて居る。これも日蓮聖人に始まつたのではない、傳教大師も守護國界章といふ書物を書かれて居る、その基くところは守護國界主經といふお經から出て居るのである。もと〳〵佛教といふものが轉輪聖王を理想として居るものであつて、これは阿含の始めから涅槃の終りに至るまで一貫して居る事である。釋尊の生れた時から、この人は出家しなければ轉輪聖王になると人相師が皆口を揃へて言うて居る、最後涅槃せられる前に阿難尊者が、如何なるお葬式を致しませうかと問うた時に、釋尊は、轉輪聖王を葬むるの式に依れといふ事を命ぜられた。それ程に生れた時から死後の葬儀に至るまで、轉輪聖王と釋尊とは殆ん

ど離すべからざる關係がある、ホンの紙一枚の表裏といふやうな譯である。であるから釋尊は國家の問題に對しては最も心を注がれて居る、もと〳〵自分が悉達太子として、迦毘羅衛國の王樣になるべき人であつたから。國家觀念といふものに至つては、他の學者や宗教家とは大いに異つて居る。孔子や孟子は國家の經綸に關して議論は吐いたけれども、釋尊は躬から國家を經綸し得る地位を有つて居つた方である。故に當時印度第一の大國であつた王舍城の頻婆沙羅王も、國家經綸の事を釋尊に尋ねて居る、その他佛の弟子には國王が澤山あつた、國家の問題は始終說法せられた譯であつて、あらゆる宗教中佛教の思想くらい國家觀念の完備して居るものは無いと謂つて宜いのである。

此の國家觀に就ては儒教などの方が、日本の國體から見たならばハツキリしない所がある。儒教では『天下は天下の天下なり』といふやうな譯で、眞の國家の觀念がハツキリして居ない、それが爲めに支那の現狀があゝいふ混亂を續けて居るとも謂へるのである。實に支那の國家といふものは醜態を演じて居る。孔孟の學に於て國家の理想といふものが明確になつて居ない所があるから、伯夷叔齊の行動に對しても評論が一定して居ない、周の武王の仁不仁といふことも、孔子も孟子も能く論定し得なかつた。伯夷叔齊は武王の馬を叩へて、殷の紂王如何に惡逆なりと雖も、あなたが臣下の身にして君を討つのは不法である、暴を以て暴に易へるものぢやと言つて諫めた、併し武王は遂にこれを肯かずして紂王を討つて天下を取つたのである。孔子はこれに對してどちらにも團扇の擧げやうがない、先づ『伯夷叔齊は賢者なり』といふやうな事を言つてお茶を濁したのである。孟子に至つては『匹夫紂を誅するを聞く、未だ君を弑するを聞かず』と言つて、紂王は王樣ではない、一匹夫であるといふやうなことを言つてごまかした。それが爲に支那はあの通りに禪讓放伐相つづいで、今日まで三十八、九遍も王朝が變つてしまつた、遂に今や中心の無い狀態になつて、南方ぢや、北方ぢやといふやうになり、何處に國都があるのかもわからぬ、南京ぢや、イヤ北京ぢや、奉天ぢやといふやうな混亂極まりないことになつてしまつた。まだ〳〵支那は何時になつたら本當に統一ある國家を形成するかわからない狀態である。それにはいろ〳〵の事情もあらうけれども、やはり孔孟の學に於て國家意識がハツキリしない結果である。

佛教の國家觀念、轉輪聖王の理想等が整頓して居ることは、儒教などとは比較にならない、實に立派なものである。それは詳しく論證しなければならぬ事で一言には盡せないけれども、それを證明するところの經典は澤山ある。守護國界主經、大薩遮經、或は佛本行集經、その他一切經に亘つて轉輪聖王の思想といふものは非常に詳しく說かれて居る。それ故に聖德太子が佛教を我が國に取容れられる時分にも、佛法を輪王の佛典と稱せられて、轉輪聖王の所謂帝王學として佛法は學ぶべきものであるとせられた。それ故に歷代の御皇室の聖德にも、佛教の影響といふものは多大なる關係を有つて居ることである。佛教が非國家的だナンといふことは、禪宗坊さんが唯だ色即是空、空々寂々……ポカーンといふやうな事を言うて居るのを見て、それを以つて佛教の全部なりと思つて言ひ出したことである。

又佛教が迷信的であるといふことを、教育者などが能く言ふけれども、佛教クライ合理的の宗教はない。世界に合理的宗教を求めんか、佛教より勝れたるものは無い。而して其の合理的宗教の中の最も完備したる眞實を說きしものが法華經である。今佛教を非難する人々の言ふ合理的といふ事すらも、眞の合理ではないのである、何となれば彼等は科學の知識にのみ偏傾して居るが故に、モウ一つ高き思想か

ら見れば彼等は科學の迷信を有つて居るものである。宗教に於て論ずるところの魂の事も、神佛の事も、宇宙の本體も能くわからないのである。科學が人智を誇りながら、魂の事が一つわからない、それではサッパり駄目ではないか。「人間の魂はどんなものだや」「そんな事はわからぬ……人間に魂などは無いものだ」……斯ういふ獨斷的の斷定を下すに至つては、眞面目な話は成立つものではない。その時には道德の根抵も喪はれてしまひ、社會構成の原動力も喪はれてしまふ、人間が魂の無いものだといふことになつてしまへば、人間を殺すといふことも其の意味は輕いものになつてしまふ、魂の無いものを殺したならば、瓦を割つたのも、茶碗を壞したのも、人間を殺したのも同じことである、時計が壞れたのも人間が死んだのも同じことになつてしまふ。魂といふものゝ價値を認むる所から、初めて人間の生命に重大なる意義があり、そこに道德も生じ、社會の構成も出來て行くのである。だから科學者が偉さうなことを言つて、科學の知識萬能のやうな事を言ふけれども、それは非常な誤解である、勿論科學の知識が物質的の方面に於て尊重すべきことは認めなければならぬけれども、更に精神の方面に於て哲學の高遠なる知識を尊重しなければ、完全なる人類の文化とは言へない。チョウド番頭が威張つて主人を追出してしまつたやうな話で、科學跋扈の文明といふものは禍ひなる哉である。

此の事は天下の定論としてきまつて居る事である。法華經は東洋の哲學を代表するところの堂々たる眞理を有つて居る、さうして一面現代の科學の知識と少しも衝突をしないものである。多くの場合は科學の知識を重んじ、小さい枝葉の事柄は科學の知識の教ふる所に委せて少しも反對をしない。西洋の宗教のやうに、あらゆる問題に偏狹なる解釋を下して科學の知識と衝突をするやうな事は全然ないのである。宇宙の成立を論ずる上に於ても、その他いろ〳〵の問題を論ずる上に於て、佛教の說く所は頗る科學的知識と一致しやすきものである。唯だ科學が跋扈して科學の領域を飛び超えて哲學的知識を否定し、人間の魂は消えて無くなるナンといふ事を獨斷的に言ふことは絕對に許さない。それはモウ科學でも知識でもない、唯だ一個の獨斷である、無くなるか、無くならぬかわからぬものを、イキナリ無くなると言ふ、それは一種の放言漫語に過ぎないものである。世界の科學者を全部あつめたところが、人間の魂が死んで消えるといふ事の確認を與へ得る者は無い、それは吾々の知識ではわからぬと言つたら宜い、わからんければ默つておとなしく坐つて居れといふことになる。わからぬものを無いと斷定してかゝるといふのは、獨斷であり僭越である、さういふ輩が法華經の信仰を迷信的だナンと言ふ權能もナニもあるものではない。

唯だ法華經を信ずる者の間に流弊の末に於て、病氣になつたらお水を飲んだら宜いとか、お札を置いておけば火事があつても家が燒けないとか言つて、むやみに迷信に似たやうな事を鼓吹する者がある、それは非常に間違つた事であつて矯正しなければならぬけれども、それが法華經信仰の正統ではない、流れて弊を生じたものであることを知らなければならぬ。それは正しき宗教の觀念として、神佛に守護つて貰ふといふ信念を持つことは宜いけれども、それが極端に趨つて、病氣になつたら醫藥は要らぬ、お水を飲まして置けとか、火事になつても消防に努めることは要らぬ、お札が貼つてあるから大丈夫だ……といふやうな事を言出してはいかん。所謂人事を盡して天命を待つといふとほり、人間の力の及ぶ限りは人力を完うし、科學の知識に依つて及ぶ範圍は科學の力に委せて、更にそれより以上の所に哲學宗教の力のあることを知つて行かなければならぬの

である。さういふ事も法華經を學ぶ者は正解して置くべきである。

斯の如く法華經の教は、決して厭世的なものではない、獨善的なものではない、非國家的のものではない、迷信的のものではない。それ等の缺點は悉く除き去つて、實に立派な宗教として完全無缺な意義をもつて世を救ふ教である。是れ即ち釋尊出世の本懷なるが故に、日蓮聖人不惜身命の教なるが故に、實に尊き教である。吾等この教を得て信仰を立つることを得たのは、人生に生れ來つた最大の悦びである、それは何物を與へられたよりも有難い事である、良き良人を得、良き妻を得たるよりも、如何なる名譽を得たよりも、進んで言ふならば全世界の財寶を與へられたるよりも、此の法華經の信念に立つことを得たのは眞に最大の幸福なりといふことを確く信じて、さうして釋尊の大慈大悲に感孚して居る精神が、法華經の正憶念といふものである。

諸君は幸にして此の正法に近づき得たのであるから、自分の我儘な考を振り捨てゝ、信じて而も信ぜざる者、實經の文を得て權經の義を解する者などといふ譏りを受けないやうに、その信仰は明かに法華經の本意に合して一分も違はない、日蓮聖人の所謂靈山の相承に芥子の相違もなき色も變らぬ正憶念に住して、お互に倍々信仰を進めて行きたいと思ふのである。（完了）

一代聖教の中に法華經は明鏡の中の神鏡也

日蓮聖人神國王抄

諸教の批判に就て

所感　山本勉彌

（前略）松村先生は釋迦出世の時代は文化頗る幼稚で、人類學社會學宗教學等の諸學が今日の如く開けず、釋迦の智識は現代人より見て餘程低劣であり、從つてその悟つたと云ふことも、たいしたもので無からうと云はれるが、此立論には首肯し兼ねる、成程人間が水中を航行し、空中を飛行し、千里を隔てゝ人語をきゝ得る樣に、所謂科學の發達は僅か一世紀前の人でも、夢想し得ぬ所であるが、さて知識の斯く發達したといふ今日、世間を見廻はして眞に頭の下がる大人格者が何人あるかと考ふれば、誠に心細い、釋迦の思想を辿り、釋迦の行跡を鑑み、釋迦の感化の偉大なるを思ふとき、我等は自然に頭が下り、無條件に釋迦を信頼する心が生じる、釋迦の悟りのたいしたものであるかないかは、唯吾人が釋迦を研究することのみに依つて知り得るので、その時代の科學的文明の尺度によりて豫斷を許さぬのである、先生の批判はその根底の規準が誤つて居る。（中略）

法華經は松村先生の云はるゝ如く、佛滅後五百年頃の著作であり、その一言一句の端々で、釋尊の直說とは考へざるも、尙同經は諸經中の王たるを確信し、その大意は釋迦の思想を遺憾なく表顯し、最高最遠の中心思想が是によりて始めて確立し、是あるが爲めに釋迦の意を傳ふる一切藏經は、益々光輝を發すると考ふ、此間の消息は本多猊下も統一誌上に、縷々として說かれてある、一讀明瞭でないか。（中略）

本多猊下が常に唱導せられて居る、佛教統一の大理想に對して、余は渾身の敬意を表し、此理想實現に向つては、何處までも驥尾に付して、微力を盡し度いと思つて居る、現下の狀況にては自己の信仰情操の滿足は得られ樣、少數の人に感化も與へられるであらうが、そは他宗の立場と大差はない。忌憚なく申せば、現在の日蓮教學は他宗を同化して、佛教統一を劃すべく、その教義儀禮が未だ完璧のものとは思へぬ、法華經中心の說教はよろしきも、他教の慈味をもつとよく振舞はなければならぬ、實際問題として南無妙法蓮華經の題目の下へは、他宗派のものが追從し來たることは六ツかしい、日蓮を捨てゝも、

眞に釋尊に歸れ、斯の如く虛心坦懷、自らもその殼を脫する決心を以て、大理想の樹立に猛進すれば、他宗のものも感應し來り、茲に現代に適應したる新經典編纂、新儀禮制度の機運が醸成せられ、始めて統一の實績が擧がり、理想の佛國土が建設せらるゝに到るであらう。余の言議は日蓮主義に好感を有するものとして、受け取れぬかも知れないが、然し日蓮主義正統の研究の結果は、こゝに到達すると信ずるのである、本多大僧正に期待することの大なる餘り、かゝる思ひ切つた辭を連らねたのである、讀者幸に宥恕せられよ。

我が體驗より

森　福　次

（前略）私しは思ひます、如何に知識や學問が優秀なる御方でも、法華經を口に讀むばかりでは、その本質精神を味識することが出來ないならば、何んの價値もないものである、日蓮聖人が法華經を主張される所以のものは私達の生活そのものの上に强烈なる實行力……如何なる難に値ふとも使命を完うせんとする尊い努力……が此の法華經の信仰であらねばならぬ、といふ點に重大なる意義をなすものであります、「諸敎之批判」中の「釋迦に就き」の項に、松村氏は現在幾百千のお經が釋尊の直說でない、又釋迦は現代の進化した學者に比べると、無知無學な徒であるその釋迦に對しなぜ現代の進化した者が頭を下ねばならぬかと言つて居られますが、これは私達の最も首肯し難い點であります。學問が進步すれば其の新しい學說を知らない親には頭を下げなくともよいと云ふことは、どこから來たる思想なんでせうか今日まで日本が文明國として常に他の海外諸國に誇りて來つたのでありますがその文明の根本的民族心の奧底に輝く思想は、私達が今日も常に、最も尊重すべき道義仁愛の精神がその根本をなすものであると存じます、人間の上には、親子の關係として、親は子を愛し。子は親を慕ひ、遠くはその先祖を崇拜する念が起り、そこに一家の美風となり。進んでは一大家族主義たる他に比類なき我が國體の尊嚴を保ち。上に萬世一系の天皇を戴き下に億兆の心を一にする國民の道義的結合をなして行くのであると思ひます、その感謝的報恩的の淸き情操が即ち忠君愛國の民族心として私達國民の上に流れてゐるのであります。如何に知識が發達し、學術が進步しても。此の報恩道德の意義を徹底せしめ、各自の人格を向上せしめる事が必要であると存じます、故に人格の覺醒を高調する法華經と之れが根底をなす眞佛の實在を說れた、現身佛の釋尊に頭を下ることは決して時代後れでなく。無知な徒でもない、寧ろ幾百年の昔佛敎が傳來して、我が帝國の精神文明を豐富にした功績は偉大なものであつて遲々として、進步しなかつた、維神道の思想とも相調和し。我が國民生活の進展に質したことは實に顯著な事實であります。又明治大帝の御慈愛の大御心をこめさせられた、敎育勅語の御主旨と法華經の思想が同一の意味を持つのみならずそれに深味を與へた報恩敎であることも注意すべしである。御互がすべての事柄を道德的に行はんとする上には、恩あることを知りその恩に對して、必らず報ぜねば成らぬと言ふ自覺が起りそして勇猛精進して完全に實行してこそ始めて理想的の人格が向上するものであると存じます、私しどもが一日でも安穩に生活を營む事の出來るのも一重に先覺者や幾多の事業を殘された先人の御蔭であつて、私しどもが生命を保つ上にはどうしても重なる恩として忘れては、ならないものを佛敎では四恩が說れてある。釋尊は自ら主師親の三德を具へられ慈悲廣大なる御心から一切衆生を救はれた、それは全く精神的の救濟であつて、實に日本國の誇りとする道義仁愛なる國民道德を報恩主義的に敎たものであると信じます。又修行としては、菩薩行法を敎られ、各自の人格を向上し、理想の世界を建設すべきを說き、事現と人生の幸福を招來することを敎へられて居る現代の如き思想國難とか、經濟國難とか、云ふも、此の强き菩薩行の發現があるならば、其の不幸を轉じ難局を打開することが出來るであらう、その事を旣に繰返し〳〵敎訓されて居る事とであつて最も人生の注意すべき事であると存じます。それで私しどもが生活をする上にはどうしても四ツの恩あることは爭れない、そうしますと如何に學問が進んでも知識が進んでも七八十歲迄でも生命を保つ上には必らずこうした恩のある事は、人間として忘れてはならない事と存じます。それに現代の識者や學者はなせ

釋尊を否定し人格を無視するのでありませうか、こうした尊い恩を忘れ、道德を無視する樣な、識者學者は、表面は偉らそうでも、世に恩ある事を忘れる樣では獸類に等しいものであると思ふ、一家に於ても一村に於ても、國家に於いてもヨリ以上知識や學問が進めば親にも師にも國王にも頭さげる必要なしとするならばそれは道德を無視し人格を否定するものではありますまいか、そうしますと、明治大帝の尊い教育勅語も新時代には、必要を感じなくなるのではありますまいか、そうした考方が社會の眞理であるとするならば我々は一旦緩急あるときも誰人に對して義勇公に奉じませうか。そうした、思想は實に國家を亡じ人生を滅却するの根元では在りますまいか、現在起つた教化運動なるものは、何にが爲めでありませうか。正し事は何時迄でも正しいものであつて時代が進み知識が進めば猶更精神上に於いても完全に進むべきであるが、こうした現在の惡い事實を見るのは、人格を無視し道德を無視した結果ではありますまいか、人間として、國に生れたならば國家の恩を知り國を愛する心なくては自ら身を滅すものではありますまいか、眞に法華經を體得された、日蓮聖人は愛國の至念から立正安國論の中に

國亡び人滅びなば、佛をば誰れか崇むべき、法をば誰か信ずべきや、先づ國家を祈つて須らく佛法を立つべし。

汝一身の安堵を思はば、先づ四表の靜謐を祈るべし。

と宣まはれました大聖人は、實に國家を愛される強い意志をお持ちになつたと存じます。又その態度に於いても、我は日本の柱とならん、我は日本の眼目とならん、我は日本の大船ならんと偉大なる國民的自覺の元に御誓願を立られ御一代の御奮鬪内には有ゆる法難と迫害に出會ても「誓ひし願望破るべからず」と言つて非常に強い偉大なる人格を發揮され法の爲め世の爲め、大目的を達せられた私しどもはこうした歴史の事實を知つた以上益々之に順從して生の爲めにも世の爲に努力せねばならないと存じます、そうして益々人格を高調する事に依つて今日の教化運動の目的は達せられるものであると存じます、私達が人格の向上とを圖る上に於いては、是非とも此の正しい法華經の教に依らずんばあるべからずと言ふ事は日蓮聖人を以つて證明するものであります。それで此の法華經を社會の人々がこぞつて信頼し實行する樣にすれば必らず現代の思想國難經濟國難も完全に解決する事と存じます。私しはこうした自覺の下に信仰の途を辿るものであります。

松村介石氏に與ふ

高風

（前略）貴下が物識りでないとは決して申しませぬ、申しませぬが一切經を讀破して而して釋尊を評して居る者でない事だけは斷言出來ると思ふ、一體、小學校の先生が教壇に立つて生徒たちに教へる時だつて、彼は、「水素と酸素とを混ぜて火をつければ水になる」ことだけしか知らないで生徒に教へる者ではない。彼が生徒に教ふる所の物は彼が學び得た處のホンの一班である。彼の頭の中には化學方程式もあり分子說も原子論も電子說も入つて居るのだ、ぐらゐの事は貴下も先刻承知であろう。今、一切經七千三百五十九卷は、釋尊のお悟りのホンの一班である。一班を以て全豹を推して見たならば、「大した物ではなかろう」などゝは言へない筈だ。

次に貴下は、「釋尊が無學の徒である」との理由として、ソクラテスやキリストや孔子を知らなかつた事を擧げて居られるが、釋尊が彼等を知らないからは無學だといふ事は、その彼等が、釋尊以上の人物であつた場合にのみ言へることであつて、もう問題にならない論理であらうと思ふ。御自慢の人類學も、佛教の因果律の活用には及ばんでせう。若し佛教を學び損はずに、始めから眞ッ正直に佛法を奉じて居たならば、人類は今日もつと〳〵進歩した文明を持つ事が出來たであろうと思ふ。百の社會學も、施の一字には及ばない。千の宗教學も一つの法華經には及ばない。天文學だつて同じ事だ。アメリカに百吋の望遠鏡があつて一信光年の獨立宇宙を見る事が出來ても、六萬光年の銀河系宇宙の中心は觀測出來ぬと言ふ。たゞ見るだけならば我々はアンドロメダ宇宙を肉眼で見る、が天文學は、僅か二千萬里弱の火星に生物が住むや否やをも知らんではないか。天文學が自慢になるのは、望遠鏡以外に、生物觀測器でも出來て、地球と他の天體との間に、文化の交換が

出來るに至つた日の事だ。今日の學問なんかをいくら振り廻した所で、それは單なる物識りに過ぎない。たゞ妄想裡に求智の欲望を充たし得て悦んだつてそれは重箱の隅から布巾屑を得て喜んでるやうな物で、チツトモ腹の足しにはならん。口惜しかつたら法華經へ入つて、「東方萬八千」「三、五」「空中唱聲」「猶如今日」等に學び給へ。何？　法華經は佛說でない？　果して然らば、その作者は、何を苦しんで、之を佛敎として世に發表する必要があらうか。優に專ら一大宗敎の創說者となつて萬世の渴仰を一身に集むる事が出來たに違ひないではないか。それを敢てせずして、法華經の中に、佛敎の第一義、特に釋尊の大慈大悲を說く事、至れり盡せりなのは何を意味するか。これ取りも直さず經家が誠心誠意、芥子ばかりも相違なく、佛說を傳へやうとした努力の跡を偲ぶ事が出來るではないか。この經家の態度を考へたばかりでも、釋尊の偉大な事は想像出來るではないか。須く洗面一回して來つて日蓮主義者を恭敬すべきだ、妄言多謝（下略）

松村氏に呈す

渡邊清吉

我輩は耶蘇敎は已に取るに足らず儒敎にても飽滿するを得ずして佛敎に歸入せるもの宗敎研鑽の爲め松村介石氏に對し質疑を呈す。

（前畧）

三、松村先生信仰の神は道德的の示導を爲す力を缺けるが爲めに儒敎の力を借用する必要あるとの事換言すれは無道德の神なるが如し此の如き神を吾人が信仰の對象とする價値ありや。

四、法華經は佛滅後數百年にして始めて世間に出でたるもの故に佛の直言にあらずと云はるゝが(1)古來名著秘書にして幾百年間愛惜家若くは何等かの事由の爲め秘藏されて世に出でざりし例は幾多あり(2)幾多の歲月間口傳となり居たるものを其煙滅を惧れて記錄となりたるものもあること故に其人の死後直ちに世に現はれざりしとて其人の說にあらずと言明を爲すべきものにあらず。

五、法華經は釋迦五拾年間の複雜難解を極むる浩瀚なる說法の全部を包括せる大經であるから佛自身にあらざる他人が之れを說了せんには少なくも釋敎の全般を讀破悟了したる上にあらざれば爲す能はざる譯なり果して此經が釋尊の言にあらずとせば此の至難の大業を爲し遂げたるは何人なるか先生の學問を以て明示せられたし。

其他多々あるも煩雜なれば畧す兎に角大道は一に歸す彼でもよい此れでもよいと曖昧のごまかしは徒らに世道人心に害あり須らく究明を爲すべきなり快答を希願す　以上。

松村翁に呈す

羽入田眞人

（前畧）二三翁の所說に據つて今之を立論する事とする先づ『各派各經に分れた議論では不可ない其の統一した所を欲す』と是一、次には『本當の處から云ふと向つて拜むものも祈るものも感謝するものも何もないから宗敎では無く哲理の悟得に止まるのである』と是二、又次に『天地萬有は一物の權化變化に外ならず而して天地萬有の間に因果の法ありて之を支配す人間又其の支配下に在つて離脫し能はざるが故に消極的には諦めて之に服從し積極的には之を悟つて其れに合心合體して行くのである』と是三、第一の說は釋尊一代の說法を但散漫斷片的にのみ見て未だ一切藏經の綱領とする法華經の內容に觸れて居らざる事を證するものである第二の說は佛敎を唯哲學的にのみ見たる誤謬であつて未だ之を宗敎的に又現實に應用的にも見てゐない所謂皮想の見たる證據である第三說は森羅萬象の有爲轉變の相と其處に存在せる法則理法とのみを見て未だ其等一切の眞理を人格化したる絕對常住快樂の本佛の在る事を知らず悟らず學ばざるもので隨而己の佛性をも認め得ざる事を明瞭に披瀝したるものである（中略）。此の故に翁は未だ佛敎を論ずる資格無き者と言下に斷定するものである（下略）。以上法國の爲之を論ず。

諸敎の批判に就ては猶幾多の投書を見るも皆大同小異にして、最早松村氏の佛敎に對する程度は十一月號本多猊下の『信仰の根據』及び十二月號松村氏より『本多師に答ふ』を對照する時に本問題は甚だ明瞭に解決し得べきものなれば、今回限り本欄は一先づ終結と致します。各位幸に乞御諒察。

天風三萬里紀行（其七）

小林日種

七、大連より青島へ

五月六日

午前中は、御本尊に讀經したり、農場を散策したり、折柄　小孩が狼の子を持つて來たのでそれを抱いて寫眞を撮つて貰つたり、果物を喰べたり、談話したりして、のび〳〵した氣分で暮らした。

午後、皆に送られて例の假驛へ行つた。得利寺迄若林君が行かうと云ふのを辭退して結局、小林武二君と云ふ人が同行して呉れる事になつた。北行して萬家嶺驛で乘り換え再び南下して得利寺驛へ着いたのは夕方で有つた。川上農場の池田君の宅に厄介になる。

講演は午後八時から倶樂部で催ほされた。驛長の飯森氏が開會の挨拶を述べたる後『人生の意義及びその價値』の題下に語つた。

大分遠くから見えられた方も有る由で、電燈の無い土地とて、提灯の代りに、皆大きな明るいランプを下げて家路へ歸られる姿が一入哀感をそゝつた。

五月七日

農場を散策したり、紀念の撮影をしたりして心ゆく迄名殘りを惜しんだ、池田君夫妻は實に良い人達で、私は此の人達に於て初めて實在に即した生活を味識した。

彼等は泥まみれの手で足で頭で仕事着で終日、畑を耕してゐる。豚小屋は腐敗した食物からすつぱい臭氣を放ち、豚は動物的な唸り聲を連發してゐる。都會が若し崇美な友禪模樣なら、此處は、もつさりした木綿縞で有らう。都會の明るさに比べて何と云ふ暗さだらう。春でも夏でも、秋でも冬でも同じ暗さ、同じ靜けさのみである。

けれども、暫くそれを凝乎と眺めてゐるなら、私達は直きに其處に大なる生命を感ずる。そのどつしりとした靜寂と陰暗さとは私達に宇宙そのものを感じさせずには置かない。大樹は彬々として小木は簇々として、名もなき小草は、獨り靜かにその生に安んじてゐる。萬物はそれ自身一つの實在であつて、それ自ら一つの圓滿具足である。――斯くて私達は宇宙そのものと、渾然一如の境に入るのである。そして寔に、人生の要諦も亦此處に在るので有る。

日本人はもつと〳〵池田君達のやうな生活をする必要がある。血ばしつた眼、嫉妬、陷擠鬪爭、策略、虚妄、等々々、それ等の全く無い生活に憧がれる必要がある。

來つて斯人を見よ、

彼等はその境遇に處し、その信ずる所を行うて、それで滿足し、安心し、そして勉勵してゐる。彼等は決して自分と他人とを比較しない。自分は自分だけのことを爲して、運命に安んじて、そして運命を開拓しつゝ進んで行く。

私は滿洲の土の生活に於て日本人の健全なる歩き道の在る事を知つた。

滿洲の富源は、一に石炭であり、二に鐵であり、三には實に滿蒙、到る處の曠野そのものである。見渡す限りの曠野より無盡藏に取り上げられるで有らう所の農産物である。而して又此の三者は實に我が日本の恒に望んで止まない物資である。唯この中の前二者に至つては、滿鐵の裁量手腕に一任するの外は無いが、農産物資方面の開拓に到つては實に、若林君池田君等の今後の努力に待つものが多い、その意味に於ても、邦家の爲、同君達の健在を希はずには居られない。

得利寺から瓦房店までは近い、幸ひ、池田君が同行して呉れて正午少し前、瓦房店へ着いた。驛には機關區長の吉留英熊氏その他の人達が出迎えてゐて下さつた。

機關區で晝餐の馳走になつた後、大廣間で所員全部に對して『不朽の人』の題下に約二時間餘の講話をした。

それから吉留氏に伴はれて又、懇ろなる馳走に預つた。吉留氏は齒切れのいゝ、キビ〳〵した人で、

姿勢の良く、肩を立てゝ板のやうにしてゐるのが、何だか書生のやうな感じのする人だつた。

日蓮主義に對する造詣が深く、心靈問題等に對してもかなり突込んだ研究をして居られるのに感服した。

公會堂に於ける講演は當地修養團支部の主催で午後八時からあつた。吉留氏の挨拶有りたる後、余は『生活革命の第一戰』の題下に述べた。

此夜は吉留氏邸へ宿つた。

五月八日

池田君の代りに例の小林武二君が大連迄同行して呉れる事になつて、午前九時發の南下する汽車へ乘り込んだ。大連へは二時に着いた。直ちに大連寺へ赴き、留守中に着いた書信を整理したり、又明日はいよ／＼鹿島立ちだからその準備等に忙がしかつた。大連寺に於ける二回目の講演會は午後八時から開かれた、宇野僧正の挨拶有りたる後、余は『法華經の眞髓』の題下に晩く迄語つた。此夜は例によつて大連寺へ宿つた。

五月九日

早起して旅裝を整えた。出帆は午前九時だから、その前に乘り込まねばならぬ。宇野僧正御夫妻に厚く御好意を謝したる後、殘り惜しくも出發した。埠頭には、小林武二氏、滿鐵の小芝氏、大阪商船の横山氏及び大連寺の人々等、多數見送られたるは感謝に堪えない所である。

定刻、唐山丸は錨を卷いて出航した。暫く、甲板に佇立して名殘りを惜しむ。良く晴れた日で、春陽は白銀色にくるめき、紺碧の海か輝き渡り、白光が空を占領して居る。私は空氣を呼吸すると云ふよりは空を吸ひ、白光を吐くと云つた方が適當なるを感じた。

海は寔に穏かで有つたが夕刻から、青島名物と云ふ濃霧が一面にかゝりその爲に船脚が遲く、衝突を避ける爲に時々力の強い汽笛を響かせるのが無氣味に思はれて、寢床に入つてからも容易に寢付かれなかつた。

五月十日

昨日の濃霧がまだ晴れず、依然、鈍い道行を續けてゐるが、別段、一日二日を爭ふ急ぐ旅ではないから平氣で讀書などしてゐた。

五月十一日

船は約一晝夜遲れたが、それでも支障なく無事入港出來たのは幸福であつた。巫山の翠黛を望みつゝ午前八時港に着いた。

棧橋には、大橋玄妙師が先導で吉田五郎氏、岩永岩男氏、島田龍逸氏、池田宗高氏、田中寅吉氏、山口茂一氏、堀島久吉氏、鶏飼良治氏、山田泰之氏等がお出迎え下さつて、直ちに日蓮宗布教所へ案内せられた。この地は元、獨逸の經營地なので、都べてよく整頓し、支那氣分は更になく一躍西洋へ來たやうな氣がした。

四五の訪客に接したり、書類等を整理したりして此の日は早く寢ねて疲勞を醫した。

五月十三日

朝、吉田五郎氏が見えられ、市内見物を慫慂せられたので、蒼葦として出掛けた。道路は何れも、アカシヤ、又はネムの種類の並木が繁茂してゐて兩側から覆ひ重なり、隧道の樣になつてゐる箇處が多く、その上、道路ときては砥の如く鏡のやうで、一微の塵埃すら浮べず、行人走馬の影を宛然寫すやうな坦々たる理想的な道だから、それを、ドライヴする心地は涼氣衣に滿ち何とも云へなかつた。

私は常々から、足駄と自動車の泥除けなどは、日本人獨特の創意で、洵極的智惠者としての日本の國民性を遺憾なく現はしてゐるものだと思つてゐる。雨が降る、道が惡くなる。下駄では都合が惡い、足駄をはく、そしてあの二本齒で、鷲の如く、曲藝師の如く泥路を歩かねばならぬ。路は二枚の細い板切れで更に縱横に振られ割られ／＼惡くなる。

進んで道路をなほす代りに、足駄を考案し、泥除けを發明する處が如何にも日本人らしいと思ふ。日本人が何處までも道の事に不平を言はず、忍耐の美德を維持する限りは、足駄と泥除けは永久にそのあとを斷つまいと、斯樣な良き道路を持つてゐる都市を見るにつけ、つい／＼愚痴も出ると云ふものである。

青島は、北緯三十五度何分——など、小難かしい事を云ふより大連から汽船で南へ走る事、二百七十

浬、約一晝夜の行程、山東半島の西南部に位してゐて、有名な嶗山々脈から、腕をニューッと突き出したやうな尖端に當つて居り、南東側からは黄海の荒浪を受け、西北に控ゆる幅長さ共に直徑約六哩の膠州灣と相俟つて三面に海を環らし、腕の先きの拳にも似た鮮やかな緑にかこまれた小高い丘からなだらかに、砂白く輝く廣い濱邊に至るまで、一樣に赤瓦の屋根が高く低く、或は白、黄、灰色等のさま〳〵な煉瓦や石造の家が、粗に密に建ち混つて、美しい市街を形づくり、ホノルルと併稱されてゐる、此の水の都には、十萬の支那人と、一万二千の日本人と數百の諸外國人が二万餘戸に包容されて居り、拳にも似た丘から、嶗山寄りの東北に一里半離れた四方と云ふ處には、邦人經營の紡績工場が三つ有り、又、三里を隔てゝゐる滄口にも同じく邦人經營の紡績工場が三つ有り、倶に、一千餘の邦人がひたすら向上への生活にいそしんで居ると、まあ〳〵斯う云つた樣な次第だ。名所は多いが、概ね戰跡で、貯水山モルトケ砲臺、青島山のビスマーク砲台、大平山のイルチス砲台等はその尤なるものである。

余が行つたのは會姓峰の臺西鎮砲臺で全島アカシヤの山で、外見は立派な公園だが、その中に何百万の金を費した事で有らう。

サーチライトが直ぐに地底に沒するやうになつてゐる仕掛けや、上が一寸したお墓のやうに見えてゐて、地底悉くが一大城廓になつてゐると云つたやうなものが、訪れる人の眼を驚かし膽を奪はずにはゐない。

獨軍の用意周到にも驚くが、之を占領した我が軍の忠勇義烈にも感歎する。

然し、大砲に腰かけてゐても四圍の工合が最めしい砲臺に居るのだと云ふ感じを少しも與えない。

大砲の二つ並んで日の永き

歸途日本人の共同墓地に回向した、かうして異境に骨を埋めた人々の生前を思へば一掬の涙を禁じ得ない。

明の詩人高啓の

登高望廢壘　　鬼結愁雲屯
當時十萬師　　覆沒能幾存

と有る詩など思ひ出して、感慨に堪えないものが有つた。と同時に、大正十一年の十二月に空しく支那へ此の土地を返還したと云ふ事實が愼ぞほろしくも思はれるのであつた。

昨日、私を訪ねて呉れた土地の有力者S氏の『外交官は死ななくてもいのですからなア』と言つた言葉をはしなくも思ひ浮べた。

それより吉田君宅に招かれ御馳走になつた。吉田君の妻女もと子氏は、私の寺の檀家總代の娘で、私の幼時なども知悉してゐる、吉田君もたその養子とならられたので籍は館山にある、折柄懐姙中にて、私を迎ふる事故定めし男ならむと言ひつゝ有つた所が、余が埠頭に着する午前八時、急に產氣づいて、安々男兒を擧げられたので喜ぶ事限り無く、余に因んで稔とつけやうかなど申されて居られた。

越鳥南枝に巢喰ひ、胡馬北風に嘶くの喩へ、大いに御夫婦と四方山の話をして、稔君をも見て、前途を祝福した後、夕刻布教所へ歸つた。

布教所では令夫人の采配にて今宵は伊豆御難會を嚴修するとて準備に忙がしかつた。

型の如く讀經がすんだ後、大橋師の紹介にて壇上に起ち『日蓮主義の心髓』の題下に晩く迄、全幅を傾けて話つた。

因に小林師は客年四月東京御出發以來朝鮮、滿洲、北支那、蒙灣より南支那、アモイ、汕頭、廣東、香港、西貢、新嘉坡、スマトラ、蘭貢等を經て印度の四大佛蹟御巡拜今回十ヶ月振りにて千葉縣館山町本蓮寺へ御歸着の筈なりましたから附記致します。

凡そ施すべからざるもの五あり、一には非理に求めたる財は以て人に施さず、物不淨なるが故に。二には酒及び毒藥は以て人に施さず、衆生を亂すが故に。三にはわな、網の類は以て人に施さず、他に害を及ぼすが故に。四には刀弓箭は以て人に施さず、衆を害ふが故に。五には音樂女色は以て人に施さず、淨心を壞るが故に。（貴積經）

常林寺日寛上人事蹟一端

松尾清明

予頃日『現代華道家名鑑』を閲修す、中に日寛上人の事を記すも、事概略にして要を摘むものなれば之を遺憾としたるが、今回小閑を得たるを幸に、右日寛上人の事蹟を話さう。

幕末の頃、京都妙滿寺末、江戸下谷常林寺（今の統一閣の所在地）十一世の住持日寛上人は風流を以て人心を指導したる一風變りたる傳道家にして、亦以て傳ふべき苦心があつた。

上人は風流を好み、かねて茶技を遠州流信松齋一蝶の門に學び、花を佛前に供するに委を正す、專ら技術を盡して花形をねる、後に一派の祖となる、人其住地に因みて淺草家といひ、遠州流の茶技に秀でたるに依り遠州流といふ、又は其名に因みて本松齋の花道といつた。風流名を本松齋一得と號したるは實に此の人である。

△花系

ある時門人寛松齋、上人に尋ねて曰く『時人師を指して當流の元祖なりと云ふ、然れども花術は古實を愛し古きを尊ぶが如何』一得答へて曰く『吾れ花技を弄するに專ら佛前に供華するを目的とし、漸く目的を達す、學ぶところ花の眞性に從ひて自得するところあり、故に世人元祖と云ふなるべし、而して古きをたづねば釋迦如來なり、何となれば法華經には十種の行として供華を奬勵したまへり、されば釋迦如來を元祖といふべきか。近世に於ては妙滿寺妙開上人（妙開上人は豐臣時代の人）小堀遠江守政一、同權十郎政尹（日蓮宗なり）これ等の人を祖とす、故に他は我技を遠州流といふなり、總べて世人の云ふところに任す』云々。これを以つて上人の花系に對するの氣分を知ることが出來やう。

△花の委

上人の花の委は、技巧をつくし過ぎたるの感がある、今日投入盛花の流行する折から、餘りたわめたり曲げたりするのは花の自然を害し、いと見にくしと云ふ人があるけれども『尊むべき三寶諸尊に供華する上に於て、委を正し、儀禮をつくすことは當流の眼目なり』とは上人の抱負である、又曰く『正しき花の委は佛のみ委にいたてまつるべし、されば我門下の者は花技を習得するの間、知らず識らず佛の道へいそしむなり、故に世人我技を遊技翫弄と一視すべからず』と、云ふが如き我意を得て居る。

△門下及墓

上人の門下は江戸を中心として全國に及ぶ、殊に加賀前田侯の保護あり、金澤は尤も隆盛をきわむ、里松庵、青松庵、千松庵、實松庵、花の本、萬松齋、青松齊、寛松齋、玉樹齋、一甫派等の流れは皆上人の門流である、上人は齡六十の年より『年老たりよろしく風流を以て世の人心を導かん』とて始めて花道を起し、百三歳の長壽を以て身を終るまで花の道にいそしみ逝く、墓は品川妙國寺（本多侯下の寺）にあり、碑は三園神社の境内に建つてゐる。

上人の花技の教導は今日でいつてみれば社會政策を以て宗教布道をたすけたものと云へる。

記事

在米野口上人より

（第十信）

賀　正

彌御清信奉賀上候、歐米人今やヤソに厭き佛教を求居り候、日蓮主義今正く是れ時に候二陣三陣必用と存じ候、宜敷願上候草々

昭和五年一月九日

在米日主

統一閣教師
信徒各位御中

若櫻全權にも會ひ、「國體精神」一書贈り置き候。

賀　正

彌御清信奉賀上候、米國は大體に勉强國民に候、就中夫人は活動候併し我儘の樣に候、日本夫人は國體的美を發揮可被下候。

昭和五年一月九日

在米日主

統一閣婦人會　皆々樣

知法思國會懇談會

昭和五年初頭の懇談會を一月二十五日(土、晴)午後五時半有樂町日本倶樂部に開く。講師は法學博士林賴三郎氏の筈なりしも公務遽かに繁激を來せる爲め、改めて前獨逸大使本多熊太郎氏をお煩はせした、閣下は御多忙中特に御快諾「軍縮會議と日本」に就て縷々座談的に打解けたる御講演であつた。其の概要は我國民が此の帝國興廢死活の分岐である大問題に對してあまりに冷淡で寔に無關心に、而も議會は解散して若機全權を孤立に陷入らしめた有樣は全く國家の大遺憾とする處で、此四面環海の島帝國は偏に海軍と空軍で護らるべきものであるが万一の場合に我制海權を喪失せるならば國民生活の必需品たる味噌醤油等は忽ち杜絶し悉皆饑餓に頻するを思つても全國民は我全權に充分なる滿腔の誠意を以て其活動を後援せねばならない、大に知法思國の實を擧げねばならぬ旨を十時を過る迄も時間を忘れて其赤誠を披瀝下さつた事は一同期せずして襟を正ふした。詳論は「教」誌上に就て御高覽願ひたい。今回は選擧の爲めか來會者二十餘名であつたのは國家の爲めに甚だ殘念に思ふ。此懇談會は單なる晩餐會では勿論ない、又雜談煙草會でもない、そんな暇人會ではなく會員は皆現代を代表するに足る志士仁人ばかりの筈、即ち大多忙激務の中を愛國熱誠の溢れが如何に正しき法を知り其智を錬り異躰同心にして我光輝ある皇國に竭さんかを懇談熟議する重大集合であることを憶念して頂きたいと附記しておく。

教報

○統一閣本部教戰錄

△統一閣初會合、昭和五年一月五日(第一日曜)午後二時開會。一、國禮會　二、新年宴會　當日は天氣晴朗、豫定の時間には來會者百八十三名の盛況、本多日生稅下導師のもとに嚴肅なる國禮會勤修、終つて梶木師宴會に移る旨を宣すれば進行掛り加藤重太郎氏の推薦により岩野直英閣下團員を代表して總裁稅下に年頭の祝詞を奉呈、次で本多總裁稅下約四十分に亘り、吾が統一閣は幾多門下に精神的運動を起さしめた原動力と成つてゐる事、日蓮聖人の正系を繼いで居る點から云ふならば日蓮門下廣しと雖も吾が統一閣丈一なり、宣教團員諸氏は一致と堅き自信を以つて精進されむことを望む旨を述べられ、續いて來賓及團員の五分間演說に移る、指名されて晴明の宮原六郎氏次に佐藤鐵太郎中將、繁宮久遠氏、猪俣金太郎氏、荻野慶三氏、小西日喜師、井上道太郎氏(風邪の爲欠席)(書面祝詞)廣瀨調氏等であつた、中にも小西上人の「統一閣教會組織に就ての考案發表悪態本多日生稅下の四十年に亘る永き大化悪に報ひざる可からず、其れ閣員たる者時代淨化の第一戰に起つて報恩道に勇奮精進なかる可からず……」との熱火の辯に來會者一同大いに感ずる處があつた。當日の役員は「會計及受附掛」早川太吉氏寺澤萬三氏、「拵當掛」石川隆一氏、一本水悅太郎氏、西山吉五郎氏、中村藤吉氏、本田健二氏「外套掛」松岡林藏氏、當田鐵道氏「會場案內掛」佐藤錢男氏、田中道爾氏、中村清一氏「式次進行掛」加藤重太郎氏、北條平太郎氏、野鳥達平氏「接待掛」川原きん子姉、本多都喜子姉、小野とし子姉、津田愛子姉、中島すえ子姉、野澤きみ代姉等で午後四時半目出度閉會した。因に會費は一人一圓廿錢で、適當なる拵當を出した、早川太吉氏が種々本會開催の爲に御盡力下さつたことを深謝する)

△同十二日(第二日曜)午後一時半開會(降雪あり)法要に次で「年頭の所感」田中道爾氏「生活に即する信仰」機部滿事氏「宗教を否定する現代」梶木顯正師「常に戰鬪氣分たれ」小西日喜師等の講演があつた。

△同十九日(第三日曜)午後二時開會(晴天)初めに法要次に講演「尊貴なる生活」梶木顯正師「潤淡に棹して」田中道爾氏「國體の根本義」中村清一氏「合理化より信仰化へ」山口智光師本日は本多稅下御出席の豫定であつたが急に風邪の爲欠席されたので右の方々が代る事となつたのである、來會者七十餘名、同師會員機部滿事氏、小西日喜師等も種々斡旋された。

△同廿二日午後二時開會地明會初會、法要に次で講演會、當日は會長稅下生憎風邪の爲め御臨席なく「此大丈夫なり」の題にて機部滿事氏續いて和賀義見師の法話と山口智光師の玉耶經講演あり終つて土屋謙子女史の歌洲土產話の座談あり且つ梶木師本壽寺什寶の觀覽も得て盛會裡に退散せしが滿足の內にも會長稅下を拜せざるは一同の淋しさ深し。

名古屋布教

十二月五日　會館にて　開目抄講義　原田　日勇師

十二月八日　會館にて婦人會(尊貴と下賤)　原田　日勇師

十二月十四日夜　枇杷島町淸音寺に於て市佛教會主催　教化總動員大講演會　飯尾淨土宗布教師

教化動員に就て　原田　日勇師

國民の自覺　原田　日勇師

十二月十五日　開目抄講義

因に妙教婦人會は慈善慰藉會を教化會館に於て開催し港先生夫妻內本先生及內本琴子護幹部員の大活動に依り盛大を極め相當の收入を得たれば十二月十日代表者三名は市の社會課に出頭し年末貧困者に對する同情金百圓を寄贈せり。

伊勢教信

九月廿一日夜　日蓮主義大講演會を四日市安樂寺に於て開催講師「精神教化」田久保山主「國民教化と法華經」本多大僧正稅下聽衆約百二十名ありたり。

十月八日　安樂寺に於て四日市市立第六小學校兒童見學團百名の爲に「安樂寺の沿革と信條」田久保師。

十一月十二日午後二時　追分教會所にて田久保本誓「開會の辭」原田日勇僧正「純一無雜」の開講。

十一月廿三日晝　安樂寺にて御會式修行「奉者の足跡」田久保山主「日蓮主義の特長」原田日勇僧正夜間も原田師の講演兒玉阿賀等數氏の有志講演あり通夜をせり。

十二月六日　治田村貫成寺にて「奉讃」田久保師「總名別名」原田日勇僧正あり同寺は逐年盛況を極む。

大阪教報

十一月八日　蓮成寺にて立正結社誤話會。

十日　堂圓寺にて日蓮聖人御會式度修後在京中の所感京藤山主。

十三日　蓮成寺にて熊井師上田山主の講演。

二十六日　越人會本多稅下の法話同夜中ノ島小學校にて精神教化の心靈本多稅下。

十二月八日　蓮成寺にて二種の教相和井田氏不良少年の犯罪に就て京藤師。

十二日　堂圓寺にて國民の反省を促す京藤師三種の教相和井田氏。

十八日　壹坂宅にて信仰と日常生活京藤師。

二十日　川口宅にて信仰の力京藤師。

二十二日　堂圓寺にて常樂院日經上人報恩會を修し日本國民の進路不惜身命の先師を追慕す。上田師。何れも盛會多大の効果を奏せり。

福島教信

十一月十二日　本久寺御會式
信仰の價値　笹本　量義師
日蓮聖人の理想　中島　元道師

十一月十三日晝　蓮華寺御會式
日蓮聖人　永井丑太郎氏
正しき生活　菅野　顯孝師
信仰の價値　笹本　量義師
日蓮聖人を憶ふ　中島　山主

十一月十三日夜　蓮華寺にて
行くべき道　菅野　顯孝師
立正大師の御生涯　笹本　義量師
日蓮聖人の主張　中島　山主

十一月廿三日夜　郡山市二本松銀行支店にて
強く生きよ　菅野　顯孝師
受難と光明　中島　元道師
佛教眞髓之主張（六）　三谷　會善師

偶言一束

◎編輯子頃日さる人を往訪せるに、書架の一隅に數冊の月刊雜誌が帶封のまゝ無雜作に押込められてゐたのでハッとした、「柔も眼せずば病癒へず」で小冊子でも當事は最善を盡してゐる筈である、「子を持つて知る親の恩」、時には地位轉倒の考も大切と思ふ。

◎緊縮の風に面喰つて精神修養をも等閑に附せんとする者が數在せるは實に痛ましい、時代は愈眞劍に正信を要求せるではないか。

◎或る女子教育家は宗教には何の宗教でも哲理もなく論理もなく單信口唱に安住し滿足せる感情のものなれば理智を目的とする教育上に之を採用するのは害ありといふが、日蓮聖人を知らざる人の頭は概れこんなものか、こんな教育家こそ人格破壞者で、之を惡智識とふであろう。

◎陽氣の加減でもあるまいが教育家や宗教家が「衣食足つて禮節を知る」が永久に眞理だとする樣では高位顯官や貴族や富豪には更に罪惡はなさそうなものであるが却て反對の現象は聊か皮肉の感がする、心を置き忘れる人の多さ！車中の遺留品よりも更に更に！！。

◎或る青年自稱宗教家が本佛とは生命的體系であるとして萬有神を擬廻し科學の範疇に佛教を押し込めんとしてゐるが本末顚倒せる珍論で法華經如來壽量品も讀まず日蓮聖人の開目鈔にも觸れてない、こんな天狗に摘まれぬ樣御用心々々々。

誌料領收

自十二月二十一日
至一月二十日

一金貳圓貳拾錢也　福井縣　岡田九一殿
一金六圓也　札幌　本澤隆正殿
一金五圓也　靜岡縣　桑原斌有殿
一金參圓也　東京府　小西日喜殿
一金壹圓也　同　和賀義見殿
一金五圓也　東京　伊藤なほ殿
一金貳圓也　濱松　三谷芳一殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　小田末次郎殿
一金參圓四拾錢也　吳　加賀セイ殿
一金貳圓貳拾錢也　山形縣　工藤親全殿
一金貳圓貳拾錢也　靜岡縣　金子律孚殿
一金四拾圓也　名古屋　清水一乘殿
一金壹圓貳拾錢也　大阪府　馬場玫嗣殿
一金貳圓貳拾錢也　群馬縣　穴山日正殿
一金貳圓貳拾錢也　東京府　佐久間元三郎殿
一金三圓也　山形縣　坂部利八殿
一金壹圓貳拾錢也　盛岡　中村春治殿
一金二圓二十錢也　東京　松岡林造殿
一金壹圓五拾錢也　青森　柏木吾市殿
一金壹圓五拾錢也　名古屋　古市キヨ殿
一金貳圓四拾錢也　大分　大石千尋殿
一金貳圓貳拾錢也　長崎縣　福田亮慶殿
一金壹圓也　岩手縣　小原通詩殿
一金四圓四拾錢也　橫濱　松井健殿
一金貳圓貳拾錢也

一金參圓也　東京　白井勢殿
一金八圓八拾錢也　大阪　水野榮殿
一金壹圓貳拾錢也　金澤　木郷常次郎殿
一金貳拾八圓六拾錢也　東京　谷山靜邦殿
一金參拾壹圓參拾錢也　會津若松　三谷會善殿
一金貳圓貳拾錢也　岡山　羽田長喜殿
一金貳圓貳拾錢也　同　高木トタ殿
一金九圓也　戸　熊井本光殿
一金拾五圓四拾錢也　茨城縣　高島秀吉殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　岩見貫太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　名古屋　宮本藤一殿
一金四圓四拾錢也　久留米　中原通應殿
一金貳圓五拾錢也　川崎　廣瀨調殿
一金貳圓貳十錢也　岡山縣　長谷川貞穀殿
一金貳圓貳拾錢也　廣嶋　鈴木豊吉殿
一金參圓四拾錢也　茨城縣　中崎丑之助殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪府　阪口丑松殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　青山信市殿
一金六拾貳錢也　松江　米田稔殿

右難有入帳仕候也

「統一」會計

本誌が無二の信仰雜誌であり其特色の一として誌料も停滯せない事がお互の誇りであり、それが又御人格の現れであるやうに會計子は直感して皆樣に謝意を表します。

知法思國會會計報告

（自昭和三年七月至同四年十二月）

一收入之部

一金貳千八百參拾八圓四拾錢也

自昭和三年七月至同四年十二月總收入

內譯

金參百參拾參圓也　自昭和三年七月至同年十二月收入會費

金四百七拾七圓四拾錢也　自昭和四年一月至同年十二月收入會費

金壹千七百貳拾八圓也　自昭和三年七月至昭和四年十二月寄附金

金三百圓也　文部省交付奬勵金

一支出之部

一金貳千四百拾五圓參拾四錢也

自昭和三年七月至同四年十二月總支出

內譯

金參百九拾五圓壹錢也　創立大會費

金四百拾貳圓拾五錢也　講演會費四回分

金五百七拾八圓五拾錢也　屋外敎化大講演會費

金參百八拾七圓九拾九錢也　研究會費八回分

金壹百〇貳圓拾四錢也　協議會費十二回分

金貳百四拾參圓也　「敎」購入代

金壹百參拾七圓五拾六錢也　通信費

金貳拾圓九拾錢也　交通費

金壹百六圓八拾錢也　印刷費

金參拾壹圓貳拾九錢也　雜費

右收支差引

殘額金四百貳拾參圓六錢也

右報告候也

昭和五年一月廿五日

知法思國會本部會計

振替東京五九一二二番

追白、本會は益々活動範圍を擴大致さねばなりませんが、右の通り資金甚だ貧弱でありますから、會費の如きも何卒御停滯なき樣法國の爲め偏へに御願申上ます。

振替口座御利用は「敎」と御混同ない樣御願申上ます。

知法思國會寄附金一覽表

（自昭和三年七月至昭和五年一月）順序不同

金額	氏名		
五〇〇、〇〇〇圓	本多日生殿	理事長	顧問 野口日主殿
一〇〇、〇〇〇	酒井日慎殿	顧問	亀山日等殿
三〇〇、〇〇〇	佐藤梅太郎殿	理事	影山佳雄殿
二〇〇、〇〇〇	井上道太郎殿	理事	内田誠太郎殿（長谷川ふゝ殿 和田たか殿）
二〇〇、〇〇〇	伊東竹三郎殿	理事	篠崎又兵衛殿
一〇〇、〇〇〇	田中智學殿	理事	萩田淺治郎殿
一〇、〇〇〇	中川登代殿	理事	中村春治殿
三、〇〇〇	長谷川福太郎殿	理事	岩井藤吉殿
二〇、〇〇〇	河島大太郎殿	理事	若林よね殿
五、〇〇〇	坂本泰造殿	理事	磯部滿事殿
二〇、〇〇〇	永井米藏殿	理事	高見澤巖殿
一〇〇、〇〇〇	横山正三殿	理事	累德婦人會有志殿（報恩會）
五〇、〇〇〇	寺澤萬三殿	理事	中山昌治殿
三、〇〇〇	釋眞誓殿	理事	高橋義章殿（毎年五圓二回分）
五〇、〇〇〇	長島彌一郎殿	理事	安江清海殿
一〇、〇〇〇	藤平日學殿	顧問	今成日誓殿（毎年拾圓二回分）
一〇、〇〇〇	亀山日等殿	顧問	宮下きく殿 櫻井りう殿
三〇、〇〇〇	影山佳雄殿	顧問	遠山いよ殿 齋藤りイ殿（毎年拾圓二回分）
一〇、〇〇〇	内田誠太郎殿	顧問	川奈錠作殿
一〇、〇〇〇	篠崎又兵衛殿		
五、〇〇〇	萩田淺治郎殿		
一、〇〇〇	中村春治殿		
五、〇〇〇	岩井藤吉殿		
一〇〇、〇〇〇	若林よね殿		
二〇、〇〇〇	磯部滿事殿		
二、〇〇〇	高見澤巖殿		
二〇、〇〇〇	累德婦人會有志殿（報恩會）		
五、〇〇〇	中山昌治殿		
一〇、〇〇〇	高橋義章殿（毎年五圓二回分）		
五、〇〇〇	安江清海殿		
二〇、〇〇〇	今成日誓殿（毎年拾圓二回分）		
四、〇〇〇	宮下きく殿 櫻井りう殿		
二〇、〇〇〇	遠山いよ殿 齋藤りイ殿（毎年拾圓二回分）		
	川奈錠作殿		

毎年拾圓一回分	織原克己殿	一〇、〇〇〇
毎年一回拾圓分	細野長雄殿	五、〇〇〇
毎年一回拾圓分	石川隆一殿	一〇、〇〇〇
毎年二回拾圓分	今村藤一殿	二〇、〇〇〇
毎年二回百圓分	中村清兵衛殿	二〇〇、〇〇〇
毎年一回拾圓分	卜部喜太郎殿	一〇、〇〇〇
毎年一回拾圓分	岸野藤右衛門殿	一〇、〇〇〇
毎年一回拾圓分	野澤一郎殿	一〇、〇〇〇
	土屋謙子殿	二〇、〇〇〇

備考、會員トシテ毎年拾圓以上會費納入ノモノハ本表ニ掲ケタリ

大施主となりては、一切のものを等しく衆生に施して悔ゆることなかれ、果報を望まず、名譽を求めず、勝處に生ぜんことを求めず、利養を求めず、但一切衆生を救はんことを欲し、諸佛の本行を保たんことを欲し、諸佛の本行を顯現せんことを欲し、一切をして苦を離れ樂を得せしめんと欲するにあり。

（華嚴經）

本多猊下の三大名著

法華經要義

四六判　六百數十頁
總振假名付
定價　金參圓

法華經の教義を整束し極めて平易懇切に講述せられ、今回特に眼天覽、供臺覽、空前の好著なり。

日蓮主義の心髓

四六判三百五十餘頁
總振假名付
定價　金壹圓八十錢

法華經要義の姉妹篇なり、日蓮主義の精髓を領得せんと欲する者の必須缺くべからざる良書なり。

日蓮主義精要

四六判　七百餘頁
總振假名付
定價　金參圓五十錢

十二篇に分類し教義信條の整束歸結を懇說せるもの、誰人にも易々として理解の金鍵を與へらる、空前の指針、大燈明の賞讃あり。

「教」發行所

統一定價	
一冊	金貳拾錢　送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢　送料共前金之事
一ヶ年	金貳圓貳拾錢　送料共

統一廣告料	
表紙一頁	金貳拾圓前金之事
一頁	金拾五圓
半頁	金九圓
四分一頁	金五圓

昭和五年一月廿四日印刷納本
昭和五年二月一日發行（第四百十九號）

神奈川縣橫濱市磯子區磯子町廣地一四八
編輯兼發行人　磯部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
印刷所　都印刷所
電話高輪六〇二四番
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所
振替東京五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

不許複製

目次

本佛の力……本多日生
先づ心を救へ……本多日生
天風三萬里紀行（其八）……小林日種
記事……
○國民教養講座案内
○各地教報
○誌料領收

第三十五年三月號